

## 投稿寄稿

## 投稿寄稿

## 「忘れ得ぬ人々」

## 小西 國男

(昭和26年機械科卒)

今回は4人の“忘れ得ぬ人々”(若林先生・谷藤正三氏・川端邦夫氏・斎藤右二郎氏)をご紹介致しますが、その前に簡単に私の略歴を述べさせていただきます。

私は昭和26年(1951)春、秋工高を卒業し、即、石川島重工(株)に入社、東京、豊洲第二工場に勤務しました。昭和35年に石川島重工は播磨造船(株)と合併し、通称石幡(IHI)となりました。私はその一陣として昭和37年4月に相生工場に勤務となり、約10年余り勤務した後、再び東京豊洲総合事務所勤務となりました。その後、所属した部門は昭和51年末、深川東陽町の原木会館に移転しました。途中、半年の出向はありましたが昭和61年(1986)9月末に、35年半勤務したIHIを退社しました。

そして即、谷藤機械(株)に入社し、2年勤務した後、同社を退社しました。

その後、東京北品川にあるY設計会社に入社し、その後、神田にある大邦産業(株)に入社、2年後同社退職、半年後横浜磯子区にある某設計会社(大会社の設計下請)に70歳近くまで勤務しました。

## (1) 若林先生との出会い

東京勤務になって5～6年後の昭和52年頃の夏のことでした。妻をはじめ娘、息子は夏休みになって忙しく、私は一人で帰郷することにしました。お盆に実家に帰るのは久しぶりでした。お墓参

\*\*\*\*\*

りも終わり、私・姉・弟と甥の4人で八幡平に行くことにしました。

昼過ぎ八幡平頂上に着いたが霧のため何も見えず、直ぐ引き返すことになったのですが折角ここまで来たのに直ぐ帰るのは残念と思い玉川温泉に寄って行くことにしました。旅館では都合よく一部屋空いていたので泊まることにしました。部屋に内風呂もあったが、私は大浴場に行きました。外湯を使った近くの大風呂に入りました。湯気で向こうは何も見えなかったが、すぐ近くの横に一人の老人が後ろ向きに、鼻唄交じりに気持ちよさそうに入っていました。しばらくして何気なくその老人を見て「あれっ」と思った。まさかもしかして、と思いつつながら風呂から出て、反対の方向から入り直しちょうど老人と向かい合わせになるように風呂の中を歩き、間違いないと思いつつ「若林先生ではないですか」と声をかけた。「そうです」という返事に私は「石川島重工に行った小西です」といったが、ぴんとこなかった様子でした。先生はどうも後輩の誰かと勘違いをしているらしかったが、しかし私が結婚式に来てもらって以来です、ねえと言うと、思い出しわかってくれたようでした。また後ほどということで別れましたが、夕食の時は偶然にも同じテーブルで隣の席でした。先生は奥様と一緒に、私は家族を紹介しました。先生は私の結婚式で祝辞をのべた人だったので、姉も弟も記憶していました。ビールやお酒を注いだり注がれたり話が弾みました。先生はここへ来て4～5日経っており、あと2～3日滞在の予定であるとのことでした。私達は明朝帰りますので、いつもお元気でいて下さいと言ってお別れしました。

翌朝、一番のバスに乗ろうと停留所に行くと、先生夫妻がいるではないか、「どうされたのですか」と聞くと「実は妻が湯当たりして、あまりひどいので帰ることにした」と言いました。バスでは私は後部の座席に乗り、先生は前のほうに奥様と一緒に座っていました。奥様は具合が悪くて大変だと心配していたが、途中まで来たとき、先生は自分の席を立て、空いていた私の隣の席にきて話しかけてきました。会話が弾んで先生は出身地のこと、奥様のことなど、いろいろ話してくれました。

前述のごとく私が秋工高を出て石川島重工(株)に入ったのも先生の紹介でした。その頃社長になったばかりの土光敏夫氏(後の経団連会長)との関係も話してくれました。先生がまだ蔵前高専の学生の時、実習に行った先が芝浦タービン(株)で、先輩の土光さんに色々良く面倒をみてもらったとのことでした。いろいろ話が尽きないまま、私の降りる田沢湖高原駅に着き、秋田まで行かれる先生達とお別れしました。

昭和25年9月、同級生と修学旅行で石川島重工(株)を見学した後土光氏が社長に就任したのです。昭和26年3月下旬、上京し下宿した家は横浜市鶴見区北寺尾(今は馬場町)にあり、この家から土光家がよく見え、そして道路(鶴見-綱島線)の向こう側には土光氏夫人経営の橋女学院も良く見えました。

## (2) 谷藤正三氏との出会い

私が就職した昭和26年(1951)頃の東京秋工会同窓会長は平野井雷治氏でした。私は毎年同窓会に出席していたわけではなかったし、出席しても同期生達の出会いは、ずっと上の先輩達とは挨拶を交わす程度で顔は良く覚えていませんでした。

相生から戻って所属した部門は増大し、東京地区の関係部門が一か所に集まり仕事ができる場所を探していました。丁度都合よく江東区東陽町の原木会館が見つかり、昭和51年(1976)12月約400人がここに移ることになりました。

その頃私はボイラーのメンテナンスやリニューアルなどする設計

の課長でした。多忙を極めていたある日の朝、秋田発電所から出張で帰った時、丁度その日は会館の防火訓練の日でした。その日までこんな行事があることなど知らされていませんでした。そして、ビルの防火訓練の発火地点は私の部屋の隅にある台所という設定でした。部屋の責任者である私は非常に慌てましたが、消防署員の言う通り行動し、全員を避難させ無事訓練は終了しました。其の後、消火器を使ってのデモンストレーションをやらされ、訓練の最後に挨拶されたのは原木会館の副理事長でした。遠くで見ていた私が、“あれ”この人、もしかして、まさか先輩の谷藤さんでは、と思い会館事務所に確かめに行ったら、もう帰った後でした。

翌日、谷藤さんからお電話があり、改めてお目にかかり谷藤正三先輩であることを確認しました。私は埼玉にある谷藤機械(株)の社長が、どうして江東区にある原木会館の副理事長であるのが不思議でしたが、後からその理由がわかり納得(昔、この木場地区に谷藤機械があった)しました。

其の後谷藤さんとは、いろいろとお付き合いがありました。あるとき、群馬県の方に工場を建てたいので一緒に見に行ってくれないかと言われ同行したこともあり。昭和61年(1986)私はIHIから某試験機メーカーに出向しました。その本社事務所は東京江東区深川清澄にありました。そして横浜市磯子区に出張所を設けることになり、私はその責任者として普段はここに出勤しました。

5月のある日、たまたま訪ねて来たS君にメールが入り「谷藤機械が買い占めにあい乗っ取られた」とのことで、もうびっくりしました。前年から秋工高校同期の友達、佐々木(茂)君が設計部長として勤務していたし、私の弟も勤め始めていたからでした。原木会館では何社かのテナントの親睦を図るため年末に忘年会、夏に納涼祭を行っていました。この会館の会議場では小さいため、前年から江東区役所会議場を借りて行うことになりました。この年の7月末の夏休み前に、納涼祭が行われました。近所に用事があった私は、会場を覗いて見ました。暗闇の中谷藤氏も来ているのを見かけたが、氏の胸中を察して声をかけられませんでした。

それから8月の或日、私は出向先の清澄の本社に行くべく地下鉄東西線で門前仲町駅下車寸前にS君と連れ一人に気がつきました。そしてS君が今朝、谷藤氏が出先の北海道で急死したとのことを知らせてくれたのです。連れの人には谷藤機械の重役で、その会社に来た理由は谷藤機械(株)で新機種を製作しようと、その助言を求めに来たのでした。

その翌日、S君を通じて前述の新機種の機械については、小西(筆者)が今までの経験・知識が一番ありそうだと、谷藤機械(株)からは是非話を聞きたいとの要望がありました。私は先日亡くなった谷藤氏の情報等も聞けるのではないかと思い、谷藤機械本社を訪問しました。2・3人の重役者達に、ボイラーの説明及び新機種の機械について見解を述べました。それから数日後、谷藤機械から入社勧誘があり、8月一杯でIHIに復帰することになっていた私は、IHIが不況(他社も同様)で退職を喚起していたので、これ幸いと谷藤機械に入社することにしました。

9月1日に谷藤機械本社に入社し、その後、は埼玉県騎西町にある

工場勤務となりました。近くに弟が間借りしていたので、此処に同居させてもらうことにしました。谷藤機械(株)には約2年間お世話になった後、都内大森駅近くにあるY設計会社に就職しました。

## (3) 川端邦夫氏との出会い

Y設計会社の業務としては、大会社の設計外注下請けの仕事が主でした。私はIHI横浜工場内の研究所に出向し、研究開発の手助けをする仕事をしていました。

そして1年半過ぎた夏のある日、親友のS君が訪ねてきました。秋工高同窓生が神田駅近くでやっている会社があるが行かないかとの勧誘でした。それから間もなく先方の社長さんがわざわざ訪ねてきてくれましたが、その人が川端邦夫氏でした。

いろいろ話合いの結果、入社することにしましたが、私が今まで経験のないクレーンの業種であるので、仕事出来るか心配もありました。その会社大邦産業(株)の仕事は、工事用クレーンの製造会社(株)小川製作所の東京営業所的存在で、この設計の手助け及び製品外注品の検査などを行っていました(小川製作所の本社は船橋市にあり工場は白井町にあった)。社長の川端氏は東京秋工会でも中々活躍していました。いろいろ話をしてみると、彼は私の故郷大曲の後輩で、私の小学校の同級生の弟でした。苗字が違うので別人と思っていたが、私より6年下で、私の家から500mほど離れた所に住んでいて、私は彼の付近の子供達を良く知っていました。

此処の会社の客先は、大手建設会社の大成建設、鹿島建設などで、主にレンタルが多くクレーンの下部の鉄骨の製作等は全国の機械製作会社に下請けに出していました。

それらの完成検査及び溶接部の検査のために、全国のあちこちによく出張しました。また私は小川製作所の本社や工場にも時々顔を出しました。2年近くなった頃、全国的に建設が下火になり、あるゼネコン大手の人を引き受けることになり私は不用にならしく、社長から辞めてもらいたいとの願いがあり、円満に退職しました。

それから約8年後の平成12年(2000)3月21日のこと、S君から川端邦夫氏が昨日亡くなり、お通夜なので一緒に行かないかとの電話があったが、その前日私は椅子から落ちて大怪我を負ってしまいました。痛さが大変で身体を起すことも出来ませんでした。救急車を呼ぶ間もなく横須賀近くの総合病院に入院したが、痛さで診察ベッドに上がることが出来ませんでした。休日なので外科医はおらず、しばらくして医者が到着、適切な処置をしてもらいました。腰にコルセット装着で身動きできず家族に支えられての行動なので、翌日S君から電話をもらった時は殆んど身動きが出来ない状態でした。なので、残念ながら通夜・葬儀には行けませんでした。

## (4) 斎藤右二郎氏との出会い

彼との出会いは77年前の昭和20年(1945)4月、秋田工業学校入学のときでした。秋田市旭南小学校卒業で同級生が何人もいて、いつも彼らと一緒にでした。あまり大きくなかったがスポーツが万能で、野球が得意でした。秋工校、秋工高と6年間共に過ごしたが、工高校最後は受験勉強に頑張っていました。しかし修学旅行には参加しなかったのが残念でした。我々の旅行は東京見物为主だったが、彼は時々上京していたので魅力が無かったのです。彼の目指していた大学はやはり高根の花だったらしい。昭和26年卒業し上京した同級生は、就職した人と私立大学に入った人は計15人程でしたが、彼は知人の関係で大館製作所(株)に入社しました。

数年後、同社東京出張所に転勤になってからは在京連中と親し



# ラグビー後援会

## ラグビー後援会

### 秋田県立秋田工業高等学校

副会長	副会長	副会長	副会長	副会長	会長
伽羅谷	黒澤	伊藤	藤田	和己	加賀屋
浩	光弘	満	和己	陽二	陽二
(昭62建)	(昭55機)	(昭54土)	(昭43治)	(昭41採)	(昭41採)



<https://akikorugger.jimdofree.com/>



1990年10月5日(皆56歳)  
東京秋工会総会にて・当時  
小西(私)・千田耕蔵氏・門脇春男氏